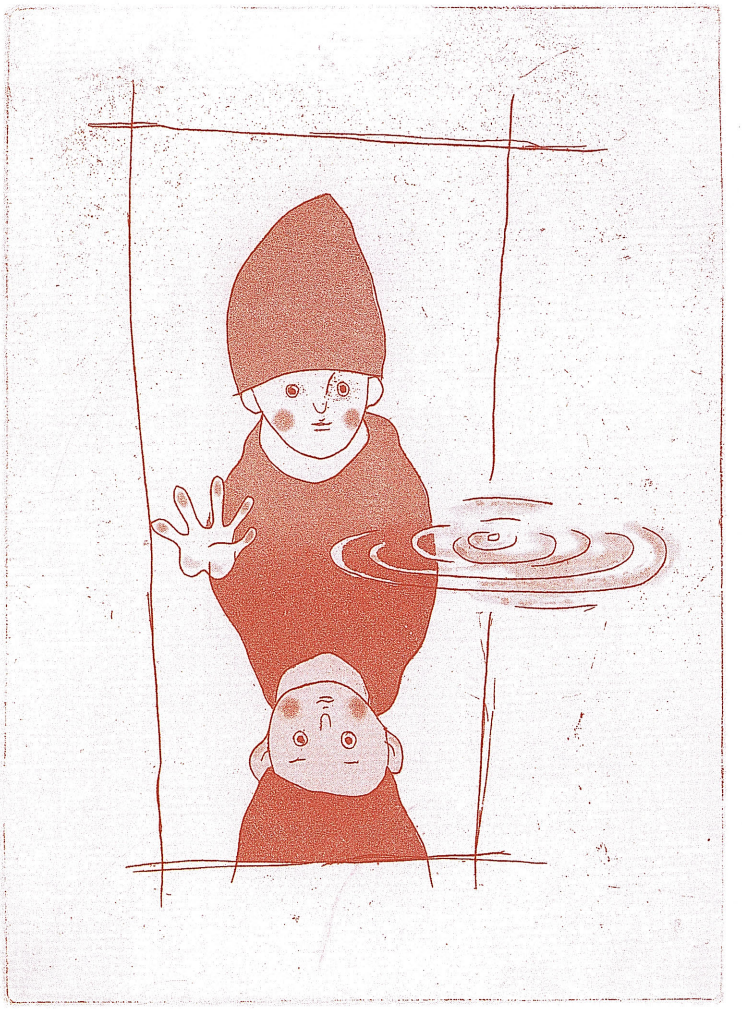
幼児の教育　第104巻　第1号　平成17年1月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



1
2005

第104巻　第1号　日本幼稚園協会

豊かな子育てのための“保育参加”ガイドブック

最新刊

もう一つの子育て支援

保護者サポートシステム

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園／著

AB判　96頁(カラー32頁)　定価1,995円(税込)

今、幼稚園や保育所は、子育て支援としてどんなことができるのか。本書は、保護者による「保育参加」を“子育て支援”の目でとらえ、その実際の方法を具体的な事例とともに明らかにしています。子どもが一人ひとり違うように保護者もそれぞれ違います。さまざまな保護者が保育に参加することによって、保育が豊かになります。子どもが豊かに育つと同時に、保護者も成長していきます。園や保育者が、保護者を大切に受けとめ、保護者とともに子育てをしていくことがどんなに大切なことかを示しています。
巻末に資料として「保護者成長支援プログラム」「保育参加ガイド」を収録。

本書の内容

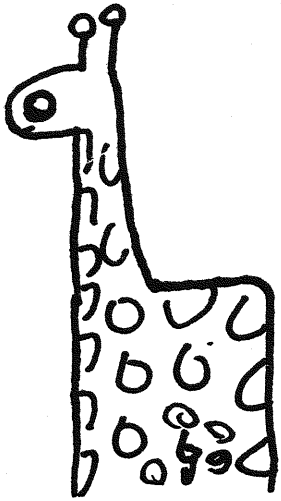
●保護者サポートシステムとは／●参加する1　保育参加／
●参加する2　保育アシスタント／●読む・聞く・話す／
●保護者の成長と園　　など

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第104巻　第1号



幼児の教育　目次

――第一〇四巻　第一号――

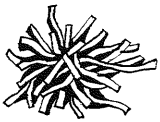
巻頭言　保育は芸術なり……青木　久子…（4）

赤ん坊讃歌……津守　真…（8）

十八世紀ドイツの子どもの本(1)
ヨーハン・ゴットリープ・シュンメル『子どもの遊びと会話』佐藤　茂樹…（14）

はれ！　ときどき・・・その⑩……さとうひろこ…（23）

© 2005
日本幼稚園協会



子どもと出会う(11)　ことばを育む環境とは……岩田　純一…(24)

〈特集〉アジアのお正月

インドのお正月……宮地　敏子…(32)

タイのお正月……堀　浩子…(38)

中国の旧正月―春節―……首藤美香子…(45)

韓国の子どもとお正月……朴　香俄…(52)

「出す」ということ……小倉　定枝…(58)

表紙絵／中井絵津子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ
編集委員／浜口　順子・佐藤　寛子・吉岡　晶子・仲　明子
編集部／河合　聡子

巻頭言

保育は芸術なり

青木　久子

保育は芸術なり

昨夏、ロシアにトルストイを訪ねた。ヤースヤスポリャーナでの教育実践と理論、十五年かけて書いた芸術論をこの目で確かめたいという思いからである。ロシアはペレストロイカから十余年がたち、激動の時代を乗り越えて生活も教育もやや安定に向かっていた。私が前任校で実践した〝保育は芸術なり〟の思想は、まだ確かな理論構築に至っていない。小林宗作の言葉「保育は芸術なり、音楽や舞踊などの芸術より一段と高い、偉大なる芸術なり」そのものである。しかし、宗作が願った保育の真髄は、日本の幼児教育の根本の問題だという認識は共通している。何故、保育が芸術なのか、そのルーツを幼児教育理

論発祥の地やフレネ学校、レッジョ・エミリアの幼稚園、モンテッソーリ子どもの家、マオリ族の幼稚園など世界十三カ国訪ね歩いておぼろげながらつかんではいたが、説明する言葉を持てないでいた。そんな折、出会ったトルストイの芸術論である。

はじめにリズムありき

プラトンは、リズムと調べは魂の内奥へと深くしみ込み魂をつかみ人を正しく育てるので、「人が理を把握しない前に〝音楽・文芸〟を教育する」とする。宗作も〝すべての事の起こりはリズムであった〟とし、生後まもない赤ん坊が子守歌で眠るのは触感によるリズムを感じる姿であり、それは感覚中枢に働きかけて人体組織の全部を振動するものであるとする。そしてギリシャ人が音楽と舞踊と詩を一つのものとしてミュウジックと呼んだように、幼児は極めて自然に心的機能と肉体的機能との調和を図るとして、保育の芸術性を高く謳いあげている。

しかし昨今、子どもの心身のリズムと調べは悪い。基本的な生活習慣は安定せず、呼吸と言葉のリズムが乱れ、体の動きもぎこちない。他者だけでなく親子の関係も調べにのれない。魂の内奥へとしみ込んだ世界観がなかなかできてこないのである。自分で心的機能と肉体的機能の調和を図れない子どもは不安定である。子どもの不安定さは親を不安にさせる。その結果、保護者は拡大する幼稚園や保育所の制度に「依存と期待」を寄せる。その期待は躾、食育、体育、情操教育、知育、関係づくりから送迎、給食、長時間託児、ラ

イヴ情報の提供など増大する一方で、親が自らの手で育児や家族の有りよう、社会との関係を改善して「希望」を創り出す経験を減少させている。当然、教師も養護性を高めたかかわりをせざるを得ない。ここで養護性とは、「相手を弱者として、指示命令による支配と介助・援助等の具体的行為をもって、身体を保護し鍛練する傾向」を言う。転んだ子が自ら立ち上がるのを喜ぶ前に走り寄って声をかけ励ます、じゃれあいや喧嘩が始まる前に静かに仲良くなるよう諭す、怪我をしないよう危険物をすべて取り除く、毎日繰り返される食事・排泄・片付けなども指示し促す。音楽や絵画も教え込み課外の習い事も引き受ける。親の「依存と期待」には教師の「受容と養護」の図式が生まれやすいのである。

戦後六十年、いつしか保育文化そのものが自然や本物との出会いから遊離し人工的になっている。「お集まり」「お口チャック、手は膝に」といった独特な保育用語、既存の楽譜を音に変換した音楽、指示に反応するリトミックや身体運動、原色が乱用された壁面、目的も分からず課す製作、先にルールありきの遊びなどと挙げたらきりがない。さらに保育が養護性に傾き自発性が拘束されるため、教師や子どもの感性や表現力は萎えて希望が失われていく。まるで保育の隘路に迷い込んでいるようである。

生活の芸術化

本来、芸術は自然を模倣し、自然は芸術を模倣するというように、本物の文化の中を生きる子どもは決して幼稚な文化を求めてはいない。豊かな日本語に好奇心をわかせる。自

然の不思議を発見し模倣して表現する。自然の色調が美的であれば美的な色調を創り出す。言葉のリズムや抑揚、フレーズを生かして歌を創作し、わき出る躍動感で跳ね動く。生活環境やルールも適宜、時と場に応じて共同するだけの精神的活力がある。その子どもの活力を生かすからこそ集団保育の場が意味をもち、生活が真、善、美を志向するのである。

オクタビオ・パスが「リズムは拍ではない。―それは世界観である。暦、道徳、政治、科学技術、芸術、哲学、つまりわれわれが文化と呼ぶすべてのものは、リズムに根ざしている。リズムはわれわれのすべての源泉である。……リズムが、制度、信仰、芸術そして哲学を育て上げる。歴史それ自体がリズムである」と言うように、あるいはイリッチが生活はartであると言うように、保育はリズムであり文化である。だからこそ共に暮らす者が創り出す文化が真実で、美的で、道徳的でありたいと思うのである。トルストイの言葉を借りれば〝上流階級の芸術は、民衆芸術から離れたものだから内容は貧弱に形式はまずく、偽物になる。本来、芸術は人間の発達や教養の程度とは関係なしに人間に働きかけるもので、それは生活に根ざした環境の中にある〟と言うように、生活という文化の中に芸術性が醸成されてはじめて人々に作用していくのである。

広大な自然を背景に、レストランで、キャンプで、バスで宮殿で人々の音楽を聞いた。チャイコフスキーのピアノの音色も弾いた。トルストイ没後百年を経て彼の芸術論がロシアには息づいていた。

（青木幼児教育研究所）

赤ん坊讃歌

津守　真

久しぶりに我が家に赤ん坊が来た。天国から直接に降りて来た孫の赤ん坊は布に包まれて、安らかに眠っている。母親の腕にしがみついて、乳をくわえている。幸せと緊張と、天国から降って来てくれたこの赤子とともに生活する幸せの中に、私はしばらく身をゆだねた。子を持つ家族のだれもが経験した同じ喜びである。

天国とはどういうものかを知りたいならば、赤ん坊を見ればいいのではないか。赤ん坊は、ひとりひとりよいものをたずさえて天から降りて来る。保育者は心の中ではだれもそう思っているのではないか。

ひと月、ふた月と日が経つうちに、赤ん坊と共にい

られる不思議さと嬉しさとがひしひしと感じられてくる。バギーの中で、衣服をゆるやかにして、手足が自由に動くようにすると、赤ん坊は快くなる。体の姿勢を変え、位置を動かし、お日さまや風の当たり具合をかえると、機嫌が良くなる。母親や祖母が抱いていると、そのうちに眠る。男性が直接に赤ん坊とかかわれる時はまだ先である。

高みの光に向かって

嵐の後、西の空に夕日が射した。赤ん坊は一筋の太陽の光を見て声をあげた。赤ん坊の感動がそこにあった。私も思わずウワーと声を出し、「キレイ」と言った。赤ん坊はニッコリ笑った。私にも一瞬ハッとする感動の時だった。大人が一緒に感動するときの子どもの喜び。

生後八カ月になった赤ん坊は、太陽の木漏れ日がキラッと光るのをジッと見つめて動かない。さわってみたら困ったような迷うような顔をした。「キレイネー」と言ったら、安心したようにニコッと笑った。自分がやったことに皆が一緒に笑う。自分も安心して、手をあげて、ウオーと言い、靴べらを振った。空に届きそうな長い物を子どもは好きである。

高みの光に対する憧れは、生まれて間もなくはじまり、生涯にわたって人の心にとどまっている。

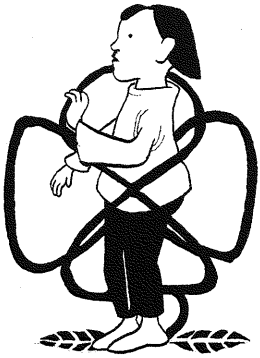
立とうとする努力

半年を過ぎた赤ん坊は座る姿勢から立とうとするが、自分の体を思うようにできない。体を斜めにし、足も斜めにして机に寄りかかる。座らせようとしても足を突っ張って立ち上がろうとするが、自分で立てない。上方にあるものに目が行く。上の方の電灯をつけると、パッと顔が輝く。立ち上がりたくて、私に寄りかかる。私が両脇を支えると立っているが、足の裏が床につかない。足の裏で踏んばれない。足が交差して

しまう。この大変さ。これも天国から降りたばかりの人間の姿だ。赤ん坊はこうしたくても、身体がそれに追い付かない。大変なものだ。

私は若い時、乳幼児の精神発達を、客観的に年齢軸にそって羅列して研究したことがある。今回、あらためて、日常生活の中で赤ん坊にかかわったとき、大人と共通の人間の姿のはじまりがそこにあることに気が付いた。赤ん坊は、非常に早い時期から高みの光に向かって目を注ぎ、高いところに手を伸ばし、自分自身が高くなろうとする。見る、聞く、触る、動くとき、赤ん坊は単に行動しているのではなく、心が動かされている。それが子どもの成長の原動力である。その力が働くのには、大人がかかわらねばならない。かかわるだけでは不十分である。子どもが感動していることに大人も感動することによって子ども自身が成長する。

地上を歩むようになった人間の悩みと希望



一歳を過ぎ、歩きはじめて行動範囲が広くなった子どもは、他の子に近づき、その子の持っている物に触る。その手は振り払われ、はじめて他人からの拒否に出会って泣く。身体の痛みよりも、気持ちの拒否が赤ん坊にはこたえる。もはや赤ん坊をぬけだしつつある。そのとき、大人はどうするか。その子を慰め、同時に、他の子が近づいたそのチャンスを上向きに生かすようにする。それが保育者である。保育者にとっては悩みは希望に転換するチャンスである。

母親不在の時の幼児の表現

母親がひととき見えなくなるのも、時間と空間の中で生きる人間だれもが体験することである。けれども歩きはじめた幼児にとって、母親の不在は存在の根底にかかわる重大事である。半日でも子どもを預かったことのある祖父母なら、たいがい経験しているだろう。机やソファーの下に好きな自動車や電車が隠してあるのを発見して、どうしてこんなことをするのかと不思議に思う。こんな風にお母さんはボクを置いて出かけてしまったとの訴えを、この遊びから聞けるかどうか。躾のことしか頭になかったら、大人の心は子どもからはなれてしまう。母親が不在になるのがいけないのではない。辛い思いをしてその時間をもちこたえていた子どもの気持ちに敏感になって、温かい言葉をかければ事態は違ってくる。

子どもの悩みは行動や遊びに表現されることを、私は「表現と理解」というテーマで考えてきた。私が保育者になって実践にかかわったときに、追求してきたテーマである。フロイトやエリクソンは玩具を隠すことを、偶然の観察として済まさず、受動的に耐えるよりほかない現実を、遊びに転換することによって能動的立場に変える力と考えた。母親不在の事態は大人も子どもひとりひとり、状況も事情も異なるから、ひとりひとりについて考えてゆかねばならない。二歳半になった私の孫は、地下鉄の階段をひとりで降りて行って、階段の下で母親と再会することを何度も試みた。私の学校の子どもたちも似たようなことをする。母親不在の時間を、「帰って来たあそび」を私と繰り返すことによって解決していったことを、以前に私は著書の中で記した。赤ちゃん、幼児、障碍をもつ子ども、いずれも連続している。それは無意味に繰り返しているのではなく、行為の文脈として大人が意識化することによって子どもも自分の行為の意味を自覚するので

ある。

子どもと生活していると、こういう例は限りがない。

子どもは自分のストーリーを生きている

むかし、私は行動だけを見ていて、子どもの生活の中の文脈を見ていなかった。

大人だけの勝手な文脈では、自分の生活ではいいかもしれないが、子どもと一緒の生活にはふさわしくない。子どもの生活の文脈を発見してゆかねばならない。行動の断片を取り上げて、大人が勝手に善悪、優劣をきめるのではない。

子ども自身の考えに沿って想像し、私共も赤ん坊も一緒に生きるこの世界の中で、希望を持って生きられるようにストーリーをつくるのである。それにはどうするか。

赤ん坊神話

赤ん坊はこの上なく可愛く、善悪を超えた人間の原初的な姿であって、赤ん坊の誕生は、むかしから神話や英雄物語になって世界に流布している。釈迦もイエスも、マホメットも。私はクリスチャンなので、聖書の記事から述べる。

クリスマスのもととなっている新約聖書のマタイによる福音書とルカによる福音書は、詳しくイエスの誕生の物語を記している。イエスの誕生には両親の苦悩の時期があったが、誕生物語は羊飼いたちと東方の博士たちの賛美、「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」という賛美の物語である。

小さく弱い赤ん坊に人生の真実が示されるという赤ん坊賛美である。時代はユダヤにおける暴君ヘロデ王の時である。イエスの誕生によって政権を脅かされる

のではないかという不安と恐怖より、ヘロデ王は二歳以下の乳幼児の殺戮を命じる。偏見を人々の心に植え付け、戦争を是とする時代であった。歴史はいつの時代も悪が主流であることを示している。その時代に、二歳以下の赤ん坊の殺戮がなされた。現代に照らしてみても、他人事ではなく最も痛ましい歴史である。

イエスはその後、ヘロデ王が死んで後、ユダヤのガリラヤ地方のナザレに帰る。多分イエスが二歳と三歳の間であろうと思われる。乳幼児期の発達は民族や時代の違いに左右されるところは少ないから、私共がここで見てきた赤ちゃんと似た成長の姿だったろうと察せられる。イエスはヘロデから逃れて、父ヨセフと母マリアと共にエジプトで乳幼児期を過ごし、子どものときは幸せな生活をしたのではなかろうか。高いところに輝く星をみつめ、それに向かって立ち上がろうと努力し、エジプトの大地でひたすら遊び、もしかしたら、母の忙しい時には、母の不在の時間を過ごし、再会のテーマの遊びをしたかもしれない。「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」と弟子たちに言われた背後にはそのような体験があったかもしれない。その幼児期の日々の積み重ねの上に、福音書に示されるイエスの知恵と、ファリサイ派の頑さへの批判の勇気とが育まれたのだろう。

二十世紀の後半、私共は民主主義と平和が肯定される時代を生きることができたのは幸いだった。世界はこの方向で進むかもしれないと私共が考えたのは幻想だったのか。それは私共がいまをどう生きるかにかかっている。

復讐をではなく、愛と慈悲の心が教育の根本である。そうでなかったらどうして現在の世界のこの悪循環を断つことができるだろうか。――「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」――〈マタイによる福音書五章〉

（保育研究者）

十八世紀ドイツの子どもの本(1)

ヨーハン・ゴットリープ・シュンメル『子どもの遊びと会話』

佐藤　茂樹

はじめに

これから六回にわたって、十八世紀のドイツの子どもの本を紹介します。十八世紀はドイツの児童書にとって画期的な時期です。ここで初めて、児童書を総体として議論するスタート・ラインが引かれました。言葉を変えれば、子どもの教育をその都度の個別的な対応から市民階級というひとつの社会全体のプログラムとして考える動きが始まったということでもあります。

児童書の成立や普及には、社会構造の変化、とりわけ家族構成の変化が大きな役割を演じているのですが、その話は一通り代表的な書物を紹介してからのことにしましょう。最初に取り上げるのは、ヨー

ハン・ゴットリープ・シュンメルの『子どもの遊びと会話』です。

著者シュンメル（一七四八―一八一三）は、子どもにはもともと遊戯への衝動が備わっていると考え、それが子どもの知的成長に果す役割と積極的に向かい合おうと試みた教育者です。ヒルシュベルク近郊のザイテンフェルトという村に学校教師の息子として生まれ、神学を学んだ後、家庭教師を手始めに、修道院、騎士アカデミー、ギムナジウムなどの教師を歴任しました。『子どもの遊びと会話』は、その間の経験と理念が具体的な書物に結晶したものであり、主として子ども同士が会話を交わす形で様々な遊びの範例を紹介して、一七七六年から七八年にかけて刊行され、好評を得ました。

ここで紹介される遊びは、何よりも集団で会話を通して行う遊びであることに特徴があります。他に交わる中でルールを理解し、出し抜き合い、補い合い、最終的な目標に到達する遊びが中心を占めるのです。集団から隔離された個の完成ではなく、集団の中での個の成長と役割の自覚、すなわち〈社会化〉こそがこの書を含めたこの時代の多くの児童書に共通する目標であった、と先取りして述べておきましょう。

機知の果し合い

さて、この本に盛られた多くの範例から、ここでは「抵当遊び」を取り上げることにします。今簡単に触れた特徴をこの例に典型的に見ることができるからです。この遊びでは、親になった子どもが、まずこんなふうに切り出します。

ユーリウス　順繰りに、思いついたことを質問していくよ。で、答えられないものは、担保を出すんだ。

この遊びの第一段階は、担保を取り合うことです。担保を取るためには、相手の答えられない質問を考え出さなくてはなりません。一方、答は即答でなければなりません。知らないことでも、知らないと言ってしまえば担保を取られてしまいますから、気転を利かせてその場を切り抜ける工夫も必要となります。

ユーリウス　プロイセンの王様はどこにいるか？

ルイーゼ　服の中よ。

プロイセンの王様ですから、当たらず触らずの答えはベルリンのお城でしょう。しかしそれでは平凡すぎますし、ベルリンを離れていることも充分にあり得るわけですから、相手の反証も可能です。質問の次元をたくみにずらして、なおかつ反証できない答えを返すところがみそなのです。あくまでも、遊びなのですから。また、時にははったりも効かせなければなりません。

レオポルト　ブロック山の高さは？

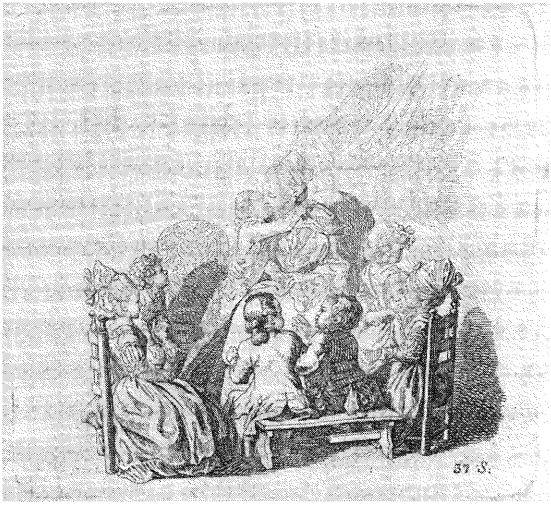
マールヒェン　六百エレと四分の一よ。信じないなら、自分で測ってみれば。

この答えは、もちろんでたらめです。しかし、「自分で測ってみれば」と言われては、もともと所在の不明な山の名前を出して引っ掛けようとしていた質問者は引き下がらざるを得ません。相手の腹を読んで、窮地をうまく切り返すことも必要だというわけです。私たちの文化の文脈では、黒を白と言いくるめるような弁論を教え込むことに眉をひそめる方も多いと思われます。しかし、ヨーロッパに暮らすとこのような対応は日常茶飯事に体験します。言

葉がすべてであり、言葉を制するものがすべてを制するという原則には揺るぎないものがあり、その場でやり込められた方が負けなのです。

こんなふうにそれぞれが機知を凝らして相手の答えられないことを問い、また質問された方も気転を利かせて切り返しながら、担保を取り合うところまでがこの遊びの第一段階です。次には、その差引勘定がマイナスのものが担保を請け戻す工夫を凝らします。きっとそれぞれの大事なものを取られたことでしょう。請け出すためには、その価値に見合ったことをして、債権者ばかりかその場の一同を納得させなければなりません。一方では相手が答えられない問いを考え出すこと、他方では答えられなかったことへの負債を取り戻すために自分の能力の一端を実践すること、この二様の知的喜びを経験しながら子どもの知育が図られるところにこの遊びに託された教育的目的があると言えます。

ある女の子は、〈ほらばなし〉を披露します。グリム兄弟のメルヘンで似た話をご存知の方もあるかもしれません。主人公が道々桁外れの男たちと出会い、仲間にしながら遍歴し、一花咲かせるという話です。七〇マイルほども離れたシュトラースブルク



の大聖堂からすずめを打ち落としたり、森の木をひと束ねにして引っこ抜いたり、ひと息で三十六基の風車を回したり、といった荒唐無稽な痛快さが読者を引き込みます。

実は、いわば教育の指南書にこのようなナンセンスな話を仕込んだ点に、時代の敷居を跨ぎかけている著者の新しさを認めることができるように思われるのです。

ユーリウス　担保を請け戻すのに、何をしてくれる。

ルイーゼ　これこそという、けたはずれで、鼻をつまみたくなるようなほらばなしを聞かせるわ。両手でつかめるくらいけたはずれなやつよ。

ユーリウス　ポシェットの中に入れてあるんだろうね。それじゃ、イヤリングを返すよ。

ルイーゼ　ことわっておくけど、昨日の晩この話を聞いたばかりなの。うちのばあやが話してくれたからよ。おおげさで、品のないその話。弟がね、これがまたたいそう熱心に耳を傾けて、何から何まですっかり信じてしまったの。ブレーメンにあるときひとりの男がありました。それは……えーと、なんていったっけ、世界を股に掛けて歩くあの、剣と拳を頼りに……

十八世紀の市民社会の基本的な考え方では、理性に照らして矛盾するものは退けなければなりません。目に見えるもの、手で触れられるものをきちんと把握する。すると理に合うものと合わないものが識別され、現状がきちんと見えてくる。その結果、どこをどう改めればよいのかという具体的な方法や手順が明らかになる。こうして人間は現状の矛盾を

変革しながら着実に進歩へと向かう。このような考え方が市民社会のバックボーンをなしていたのですから、あり得ないことを面白がるのなどは許しがたいことになります。今日の私たちの感覚でまさに子どもの領分だと思うような空想や不思議も、厳しく排斥の対象となっていました。メルヘンなどその最たるもので、子どもが乳母に夜毎メルヘンを聞かされることですっかり現実的な考えを損なわれてしまった、という記述は当時のいろいろな書物に散見されます。〈乳母の部屋〉という言葉は、迷信の温床と同義だったのです。

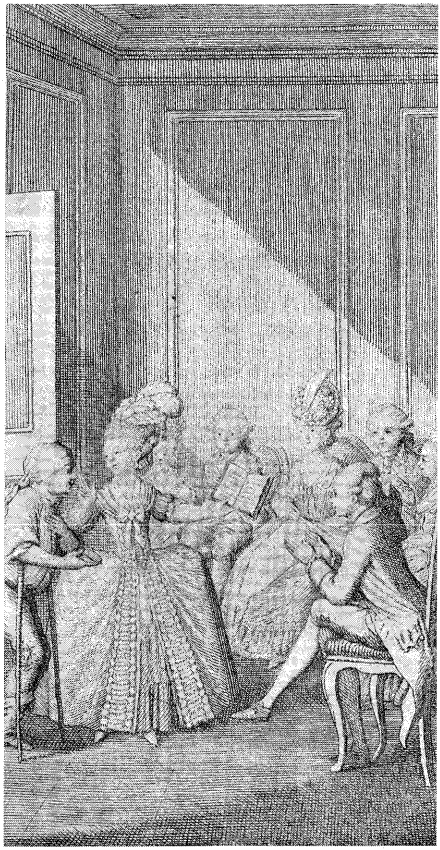
引用の箇所を理解するには、この点を踏まえておく必要があります。つまり、ここで担保の請け出しのために語られる〈ほらばなし〉は、迷信の温床である〈民衆の世界〉が長い年月にわたって蓄積してきたものに属し、本来市民社会の後継者たる子どもにはふさわしくないと考えられていたわけです。著者は当時の良識の禁を犯してあえて封印すべき〈民衆の世界〉を開けてみせたわけですが、ここでそれはなぜかという疑問に突き当たることになります。

檻の中の野獣は恐くない

長い年月の中で語り継がれ、生き残ってきたものには、エネルギーがあります。それはこしらえ物の教訓話よりもはるかに直接的に子どもの心を捕らえ、虜にしてしまう力を持っています。著者は、そうした話の面白さと力に着目しながら、一方で、時代の敷居のあちら側に半分身を置いている立場としては、子どもにそれを手放しで委ねることにはまだ恐れがあった。そこで「危険なもの」を飼い馴らす術を教えながら、飼い馴らすことでひとつ上の次元で知的に楽しめるものに変えてしまおう、と考えたのではないでしょうか。

では、飼い馴らす工夫を見ていきましょう。まず

引用した箇所では、語り手の少女はずいぶんと高をくくった口ぶりで前口上を述べています。「おおげさ」とか「品のない」とかひとまずくさした上に、弟がすっかり信じ込んでしまったという知的優越感をほのめかす口ぶりもしています。「ばあや」から聞いたという言葉は、まともに相手にするに足りないというシグナルに他なりません。こうしてみると、少女のスタンスはほらを信じ込ませて楽しむ語り手の立場とは初めから逆であることが読み取れます。さらに著者はこの話をストレートに進行させてはいません。「それは……えーと、なんていったっけ」という具合に適切な言葉をみんなでさがし合ったり



（相互学習へのうながしでしょう）、茶々が入ったりして（**アレクサンダー**　だめだよ、そんな程度じゃあ笑えないよ。／**ルイーゼ**　まあ、お待ちのほどを。だんだんすごくなるんだから！）、年少の子どもに注解を加えたり、語られる物語は途切れのない直線的な進行を再三中断されてしまいます。これでは、話にのめり込むわけにはいきません。事実、

グリム兄弟以前のドイツのメルヘンの痕跡を探していたある研究者はこの介入を残念がり、これさえなかったら本当に民衆的な語りの遺産が生き生きと再現されたのにと惜しがっているくらいです。

しかし、ここにこそ著者の意図があるわけで、のめり込むのではなく、突き放して物事を判断する工夫を施しているのです。そのためには、覚めた目を持てる距離が必要となります。〈異化効果〉の名で呼ばれる、二十世紀の劇作家の有名な手法を思わせはしないでしょうか。ほらばなしは子どもたちの会話の作る〈枠〉に囲まれており、読者は常に〈枠〉が作る視点を通して少女の語る話に接することになります。通しで聞けば虜になりかねない「危険な話」も、こうしていわば距離を作られると、批判的に関与することが可能になるわけです。

子どもたちの会話が作る〈枠〉を理性の作る柵、少女の語る荒唐無稽な話を野獣と言い換えてみましょう。読者は、あらかじめ柵の中に封じ込められた野獣を見ているわけです。同じ土俵の上では危険極まりない野獣も、柵の中に封じ込めさえすれば、観察の対象となります。柵の外にいるものは、安全な距離を確保することによって対象を客観化し、あれこれと論評するゆとりを手に入れます。この距離を作り出すことで、〈民衆の世界〉が語り継いできた諸刃のエネルギーを宿す荒唐無稽な話も、茶化しながら楽しめる〈教材〉に変るというわけなのです。

袈裟の下から鎧が見えはしても

十八世紀の文学理論のモットーのひとつは、〈楽しみと教化〉です。この時代を代表するある作家によれば、〈楽しみ〉の部分は、飲みにくい薬を飲みやすくするシロップのようなものだということになります。私たちが見てきたシュンメルの本も、子ど

も本来の好奇心を逸らさない工夫の下にも教訓すなわち大人の配慮を上意下達するという、言ってみれば、袈裟の下から鎧が覗いて見える観は否めません。この点を後世の立場から批判することは容易いことでしょう。しかし、その批判は、子どもの教育が階級の後継者を養成するという広範な目的の下で考えられ始めたという新たな局面の評価と不可分になされなければなりません。

ところで、これまで説明の便宜上、読者を子どもと同一視する語り方をしてきました。また、この本の前書きは、確かに「子どもたち」に宛てられてはいます。しかし、究極的な対象が子どもであることに間違いないとしても、最初に直接子どもがこの書を手にしたのかどうかについては疑問があります。ある研究によると、この時代の児童書はまずは大人が読むものだったということです。そして読んだものを忠実に子どもに再現させるのではなく、大人と子どもが一緒になって自分たちの着想を加えながらその場その場で自由に変奏していく、というものだったということです。こうしてみると、この時代の児童書は密室の個人的な楽しみとはほど遠く、コミュニケーションを仲介する役割を担っていたと見ることができます。『子どもの遊びと会話』に盛られた様々な範例も、そうした使われ方の中で、固定化した内容を上意下達するにとどまらず、創意工夫による楽しみと教化の融合をその場に合った形で生かしながら、著者のもともとの構想を越えて一人歩きを始めたかも知れません。

書物が予定の知識の入れ物に止まらず、有機的に次の書物の構想を胎動させていく。そのダイナミズムを感じさせるとしたら、こうした二百年前の書物もけっして用済みとはならないでしょう。

（関東学院大学）

はれ！ときどき

その⑩　＊さとうひろこ＊

ゆめ

六年生のKちゃんが久しぶりに幼稚園に遊びに来た。

「ずいぶん背が伸びたみたい……」

と声をかけると、照れたように笑った。笑顔は幼稚園の頃のままだ。

「せんせい、あのね、ちょっと相談にのってくれる？」

急に小学生の顔になって話し始めるので、少しドキッとした。

相談というのは、体験学習についてだった。じぶんのテーマを決めて、そのテーマにそった実習場所を探すのだという。

彼女は、三つの実習場所のどこにするかで悩んでいた。

「お菓子ね、作るの好きなんだけど、和菓子ってやったことないの。やってみたいなぁっておもって……」

という理由で選んだのが、駅の近くの和菓子屋さん。

「大切な人に贈ったりする花束さぁ、どうやってきれいに作るのかなぁって、前から興味があったの」

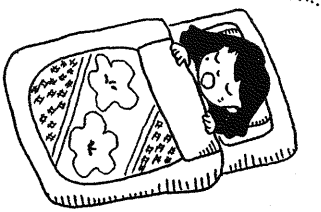
という訳で、Kちゃん家の近所のお花屋さんも候補にあがった。そして三ケ所目は幼稚園だった。小さい子の面倒を上手にみることができる人だ。選んだ理由は聞かなくても分かった。

さて困った。どこへ行ってもすてきな経験をしてくるだろうと思ったのだ。和菓子屋さんで、お花屋さんで、幼稚園で、生き生きと過ごすKちゃんの姿がちゃんと想像できてしまった。夢がしっかり未来につながっている。

実は、保育の中で大事にしていることをことばにすることが出来ず、もどかしい思いでいたときだった（相談を受けていたのは……私？）。

好きなことに夢中になって遊んだ体験は、ちゃんと生きる力につながっている。

（幼稚園勤務）



子どもと出会う(11)

ことばを育む環境とは

岩田　純一

ことばの発達は、日常の生活体験やそれをもとにしたやりとりのなかで生じる。だからこそ保育における言語環境が重要になってくるのである。そこで、子どものことばを育む保育の環境について考えてみたい。

保育者は外界の関心や興味を子どもと共有しながらやりとりする。そこでは、子どもからの表現をしっかり受けとめ、その表現から子どもの発話意図を共感的に汲み取り、そのときに子どもが求めていることばで適切に応答するといったことが重要である。このことは、今までの言語発達の研究からも明らかにされてきた。それは、保育者が、子どもにとって「よき聞き手」「よき話し手」になる必要性を示唆するものであろう。たしかに、そのようなこ

とばの環境が重要であることは言わずもがなである。そこで、ここでは、それとは少し異なる観点から、ことばを育む保育環境ということについて考えてみたいと思う。

ことばの豊かさ

子どもへの「豊かなことばかけ」は、保育の場でお題目のように唱えられる。それでは、豊かなことばかけとは一体いかなるものなのであろうか。しかし、その内容はあまり吟味されたことがなく、あいまいなままである。

しばしば、豊かなことばかけはことばの多さと同義に受けとられてきた。もちろん、ことばかけが貧弱で不足しては、ことばを育むにもよい環境とはならないであろう。しかし、ことばかけが多ければ、それで豊かな言語環境になるというわけではなさそうである。保育者のことばかけの多さは、ときとして子どもにとっては不必要に余分なことばかけになるからである。

年長児になっても、保育者がじぶんの喉をからすような保育をみることがある。子どもたちの喧騒、それを追いかけて「～ちゃん静かに」「聞いて」「ダメでしょ」「～をして」と、叱り、注意することばが飛び交う保育である。一見すると、子どもは活発であり、保育者のことばかけも豊かに映る。しかし、このような保育者のことばかけは子どもにとって豊かなものになっているのだろうか。否である。「静かに」「ダメ」「やめなさい」と、不快なことばの投売りであって、そのことばさえ騒がしい子どもの声にかき消される。さらに余分な声を張り上げることになってしまう。まさに不必要な余分なことばである。また、子どもは静かであるが、保育者がのべつまくなしに口うるさく指示し、それに従って一糸乱れず行動させるといった保育に出合うこともあ

る。これも、一見すると整然としたよい保育のようにみえる。しかし、そのような指示的ことばかけは子どもにとって豊かなのであろうか。これも否ではなかろうか。保育者のことばが、子どもの能動性を奪い、指示待ちの子どもを生み出してしまうことにもなりかねない。これらは、保育者からのことばかけは多いとしても、いずれも子どものことばの育ちにとっては不必要に余分なことばであるように思える。そのような不必要な饒舌さは、むしろ子どもからのことばの表現を奪ってしまうように思われる。

必要に余分なことば

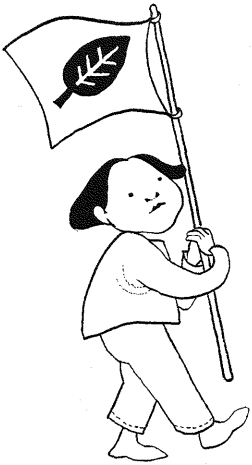
このように、豊かなことばとは、決して保育者の余分なことばの多さとイコールでもなく、保育者の声だけが目立つことでもない。しかし、子どものことばの育ちにとって必要に余分なことばがあることも指摘しておかねばならないだろう。それは、一見すると無駄口ともみえるが、ことばによる会話そのものを楽しむようなやりとりである。たとえば、年中児にもなると子ども同士が井戸端風の雑談をしているところによく出会う。耳を澄ますと、仲間とじぶんの体験や出来事を話し合い、比べ合ったりして、じつに生き生きとしゃべりあっている。これは保育（者）にとっては余分なことばかもしれない。しかし、じぶんの体験を話し、仲間の話に耳を傾けるといった楽しいやりとりが、じつは子どものことばの育ちに思いのほか大きな影響をもっているように思える。まさに同じことが保育者とのやりとりにおいても言える。子どものことばは、保育者が子どもと楽しい雰囲気を共有しながら、ことばのやりとり自体を遊びとして楽しむといったなかで育ってくるのではなかろうか。ことばでのやりとりの楽しさが、ことばの表現を学び、表現意識を形成していく基盤になるように思える。

このようなことばが、子どもにとって必要な余分のことばである。不必要に余分なことばを充満させるのではなく、保育者と子ども、子ども同士が楽しいおしゃべりを交わせるような保育の場作りこそが、子どもにとって豊かな言語環境になるのではなかろうか。

もう一つの言語環境

保育者のことばかけが子どものことばを育む上で影響力をもつことは言語発達研究からも示唆されてきた。なるほど、ことばの育ちにとって、保育者のことばのかけ方や、子ども同士のやりとりが重要になる。しかしながら、そこではいずれも、対人的な言語環境に焦点があてられてきた。その一方で、物理的な保育環境が子どものことばの育ちに果たす役割については、ほとんど言及されてこなかった。しかし、ことばとは直接に関係なさそうな物理的な保育の環境が、じつは子どものことばの育ちにとっても重要な役割を果たすのである。

子どものことばは他者とのやりとり（相互交渉）のなかで育まれていく。すると、そのような言語的やりとりを活発にする環境の設定が問題となってくる。それはまさに、物理的な場の環境設定なのである。保育の場の教具やおもちゃの置き場所、部屋の配置といった物理的な環境設定を変えるだけで、子どもの活動、子どもと保育者のかかわり、子ども同士の相互交渉に変化をもたらす。そのことが、ひいてはことばでのやりとり環境を変えていくことにも



なるのである。

(1) 保育者の位置

保育のなかで保育者がどの位置に立つかということは重要である。ある園の年長児クラスで、子どもに新聞の写真をみせながら、その内容について子どもたちとやりとりするといった実践をしていた。子どもたちの椅子は、保育者の位置から逆U字型に配置されている。その結果、保育者の対面にいる子どもには遠くて写真がはっきりみえない、側面の子どもは斜めでみえにくい。そのなかの何人かが「みせて、みせて」と、席を立って前に出てくる。それがほかの子どもの前をふさいで、「みえない」と文句が出る。保育者は「静かに」「席に戻りなさい」「前に出てきたらダメでしょ」と声を張り上げる。新聞の写真をめぐってのやりとりどころでなく、まさに命令、注意、説教といった不必要に余分なことばが必要になってしまったのである。この事態は、保育者の前に子どもを扇型に配置すれば起こらなかったことである。

保育者が子どもたちのなかでどのような位置に立つかということは、保育実践にとって、とても大切である。その位置取りが悪いため、多くの子どもの行動やことばがみえてこない、聞こえてこないといった保育をしばしば目にすることができる。せっかく子どもが話しかけているのに気づかないままでやり過ごしたり、子どもの様子がみえなかったままにトンチンカンないざこざの仲裁をしたり、といったことにもなる。それでは、子どもの言動をしっかり捉え、それに適切なことばかけをする機会を逸してしまうことにもなる。保育者の位置取りの不適切さによって、保育の流れが中断されてしまったり、子どもには不必要に余分なことばかけが必要にもなってしまうのである。その意味では、子どもの間

に立つ保育者の位置は、一見関係がなさそうにみえて、子どものことばの育ちにとって重要なのである。

(2) 空間の配置

家屋や建物の間取りによって、そこに住まう人の流れが変わってくる。動線が変わってくるからである。このことが住まう家族や成員間の人間関係にも大きな影響をもってくるのである。空間の構成や配置が、人の流れや購買行動に影響をもつことは、すでにデパートやスーパーマーケットなどでは常識となっている。商品の空間配置（どのように陳列棚を配置し、どこに商品を置くのか）が、その売れ行きにも大きく影響するのである。

保育空間の構成や配置についても同じことがあてはまるが、そのような保育環境の重要性はこれまであまり指摘されることがなかった。しかし、おもちゃの棚を保育室のどこに置くかによって、おもちゃの利用のされ方が違ってくるのである。ある園で体験した事例をあげてみよう。

玄関を入ると正面の廊下にベンチが置かれている。その廊下を少し行くと廊下に面して絵本コーナーの棚があり、その下には子どもが座るためのアーチ型になったベンチが作りつけてある。しかし、その一端には大きな陶器製の飾り物が占領している（図1—次頁）。子どもたちの動きをみていると、ベンチコーナーで絵本を読んでいる者はほとんどいないようである。そこで空間配置の変更を提案してみた。まず座って本を読むには邪魔な飾り物を移動し、正面の廊下にあったベンチをアーチ型のベンチに廊下をはさんで対置したのである。そしてベンチにはクッションを置いてみた（図2—次頁）。すると子どもたちが集まり、ベンチに対面して座りながら一緒に絵本を読み始めたのである。これは、

たんなるもの珍しさによったのではなさそうである。その証拠に、後日の報告によると一時的な変化ではなかったという。このように、ちょっとした環境の変化によって、それまであまり利用されなかった絵本コーナーが子どもをひきつけ、一緒に絵本を読みながらやりとりする場になったのである。そのような場の変化は、子ども相互の言語活動を促し、ひいてはことばの育ちに影響していくことになるのである。

同じときに試みたもうひとつの配置変化をみてみよう。子どもが通る廊下の途中に五脚ほどの椅子とテーブルが、坪庭に面する形で横並びで配置されている（図1）。廊下を通る人をみるような形で置かれているのである。おそらくは、子どもたちがそこに座っておしゃべりするために置かれたものであろう。傍でじっとみていると、子どもたちは椅子に座らないで素通りしていく。そこで、配置を換えてみることを提案した。それは、いくつかの椅子を除き、テーブルに花瓶をのせ、それに向かい合わせて椅子を置いてみたのである（図2）。しばらくすると、それまでは見向きもしなかった椅子に座りなが

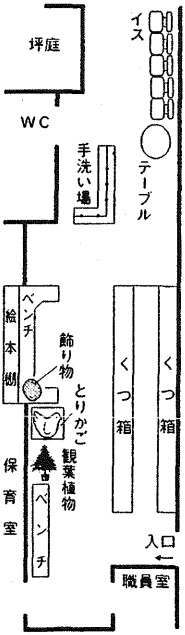


図1　最初の配置

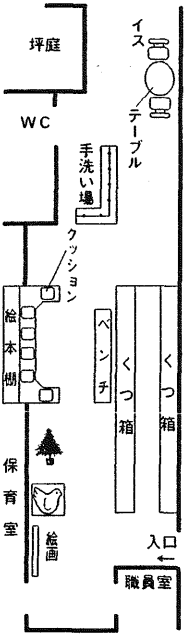


図2　変更後の配置

ら子どもたちがおしゃべりを楽しんでいるではないか。

このようなエピソードをみると、保育者は子どもの視点に立ち、なぜこのような物の配置をするのか、それは子どもにとってどのような意味をもつのかを、たえず想像しながら環境作りをしていくことが求められる。それは、子どもが環境へ能動的にかかわり、子どもたちが活発に交われるような保育の場を想像（創造）していくことにほかならない。そのような場作りこそ、子どもの言語活動を促し、ことばの育ちをもたらしていくことにつながるのである。

「ことばの指導」というと、生活発表をさせる、あいさつことばをしつける、ことば遊びをする、文字に興味をもたせる、絵本を読み聞かせる、といった活動を思い浮かべる。もちろん、それらは重要な活動である。しかしながら、言語指導やその環境はもっと広い観点から捉えられるべきである。保育の場に立つ保育者の位置取り、園の物理的な環境作りといった要因も、子どものことばを育てるもう一つの間接的な言語環境として重要な意味をもってくるように思われる。その気づきこそ、保育者が子どもにとって豊かなことばの育つ環境を準備し、ことばを育てる保育実践の要件となるのではなかろうか。

（京都教育大学）

注　本稿は、日本国語教育全国大会（一九九七）の幼稚園・保育所部会のシンポジュームで筆者が発表した内容をもとにしている。なお本文中のエピソードは、筆者と岩田陽子（モンテッソーリ教育研究者）の共同によるものである。

特集〈アジアのお正月〉

インドのお正月

宮地　敏子

Iさん、カードありがとうございました。ヒンドゥー教徒が八割を越すインドでも、ここ首都ニューデリーでは、サンタクロースやクリスマスツリーが市場には並びます。

今年はこちらで年を越そうと思っています。インドは暑いところというイメージでしょう？　でも、今部屋には暖房が入っています。一、二ケ月という短い期間ですが五度くらいに下がるので、オーバーが必要なくらいです。北はヒマラヤ、南は赤道に近いのですから気候もいろいろです。

ところで、「今年はインドのお正月をお過ごしですか」というIさんの言葉に、はたと考え込んでしまいました。「インドのお正月」。インドって「お正月」ってあったっけ、というわけです。元日も銀行

はやっていますし、年末にも日本のような師走のあわただしさはありません。

インドの友人に聞いてみました。日本に住んだことのある人は言いました。「インドには日本のような正月はありませんよ」。他の数人の答えは同じでした。「新年はいろいろあるし、祝い方もいろいろです」。新年は一月一日全国一斉の日本とは違うのです。ヒンドゥー教にはヒンドゥーの暦、イスラムにはイスラムの暦があり、それぞれ新年を迎える日が異なります。

それでは「日本のような正月」とはどういう意味でしょうか。彼女は流暢な日本語で言いました。「衣食住すべてに、特別なものを用意しますよね。着るものは伝統的な着物、食べ物はおせち料理とお雑煮、鏡餅やお屠蘇。玄関には門松。遊びも歌留多、双六、独楽、羽根突きなど。初めてのお正月で覚えているのは、友達の家族が私のために伝統的な日本の正月を経験させてくれたこと。寒かったこと。町が静かだったこと。神社が込んでいたこと。テレビもいつもと違っていたこと」。彼女はとても印象に残っていたのでしょう。そして言いました。「みんなが同じように、新しい年を祝うというのはインドでは考えられない」と。

「新年がいろいろ」という説明は、私には新鮮でもありまた不思議でした。「地方により、宗教により新年はいくつもある」というのです。ヒンドゥー教の新年は、暦が太陽暦と太陰暦を組み合わせたもので一定ではないのですが、ヴァイシャークの月の初め、たいてい四月です。イスラムの新年ムハッラムも四月ですが、同じ日ではありません。ゾロアスター教の新年は三月です。これは宗教によって新年の日付が異なる例ですが、祝い方はさらに多様で、地方によってもいろいろだそうです。

困惑した顔に見えたのでしょうか、「インドでは

ね、『十二ケ月に十三の祝い事』って言うくらい行事が多いんです」と一人が言うと、「私は『一年三六五日に、五百の祭』と聞いていますよ」と別な人が付け加えました。

国中が一斉に祝日としているのは三日だけです。これは西暦で固定しています。一月二十六日の共和国記念日、八月十五日の独立記念日、十月二日のマハトマ・ガンディー生誕日です。後の祝祭日は宗教また地方によりさまざまなのです。

Iさん、我が家には数人ハウススタッフがいますが、彼等にも聞いてみました。「新年にはどんなことをするの」。キリスト教徒の給仕は教会に行ってお祈りをしてパーティーをするそうです。元日は出勤日だし普段どおりだというコックは敬虔なヒンドゥー教徒です。

では、服を新しくしたり、その日だけの特別な料理を食べることや、大掃除をすることはないのでしょうか。帳簿を新しくするのはいつなのでしょう。また、子どもたちが指折り数えて楽しみに待つような祝日はいつなのでしょう。

熱の入れ方は地域で異なるようですが、ここデリーでは「ホーリー」と特に「ディワリ」が盛んです。ヒンドゥー暦パルガム、西暦では二月から三月にかけての満月の日に人々は「ホーリー」を祝います。冬の終り、春の訪れを喜び合い、豊穣を祈ります。この日の前夜、火を焚くのはヴィシュヌ神に帰依していたプララド王子が父王の姦計で焼き殺されそうになったのを信心の力で救われたという故事に基づきます。また色粉や色水を掛け合うのは、ヴィシュヌ神の化身であるクリシュナ神が乳搾りの乙女達に春の花を振りかけられて踊る話に由来します。昨年ヴァナレスに行ったのですがホーリーで色を掛け合った翌日、男の人たちが白い真新しいクルタパジャマを着ているのを眩しく目にしました。この日

は身分関係なく色水を掛け合っていいことになっていて酔っ払いも多く警察も頼りにならず、女性は街にでない方が良いといわれるほどです。しかし子どもたちは色水の掛け合いを存分に楽しみます。

子どもたちが一番楽しみにしているのは「光の祭」といわれる「ディワリ」でしょう。別名ディーパーワーリー（『灯明の列』の意）はヒンドゥー暦カーティック、西暦では十月から十一月にかけての新月の日と決められています。月のない夜、家々には小さな素焼きの皿にランプやろうそくの火が灯されます。ヴィシュヌ神の化身英雄ラーマ神がシータ妃と弟ラクシマンを連れ、十四年の追放から自国へ帰国したことを祝い、またヴィシュヌ神の妻で富と幸運の女神

ホーリー

ラクシュミを迎える日でもあります。デリーではラクシュミと象の頭をもつガネーシャ（シヴァ神の息子、富、知恵、幸運、商売繁盛の神）が対になったおもちゃのような飾り物が店頭に溢れるように売られています。去年のものと交換して新しい像を祭壇に飾るそうです。喪中の家はこの祭には参加しません。日本も同じですね。それにディワリに向けて壁を塗り替えたり、大掃除をしたりします。新しい服を用意し、親戚や世話になった方々への贈り物を準備します。プレゼントには菓子、ドライフルーツ、ナッツ、銀製品や装飾品など、さまざまです。当日は神棚に供え物をしプージャ（祈りの儀式）をします。ラクシュミの像の前に米麦、豆、野菜、果物菓子などを

ディワリ

供え、線香を焚きます。お坊さんか家長がお経（マントラ）を唱え、その間家族は手を合わせています。水や花もささげ、額に赤いティカをつけてもらい儀式終了。その後は供え物を下げてみんなで宴会をし、子どもたちは爆竹や花火をしたりして遊びます。

ディワリは前後五日間祝いますから、雰囲気としては日本の暮や正月と似ているかもしれません。主として家族親戚で祝われるので、ディワリの日のホテルのレストランは閑散としています。しかし夜景には打ち上げ花火があちこちで光りきれいです。その下では灯火の中で子どもたちが花火やクラッカーに興じているのでしょう。想像するだけで温かな情景が目に浮かびます。

Iさん、宗教が日常生活で根強く生きているインドに暮らしていると、四季の移ろいに影響されている日本の生活が優しく美しく軽やかに思われます。人間の葛藤や欲望が露骨に時として醜悪にも神の姿で示されるインド。自然を人知を超えるものとしてあがめてきた日本。大いなるものを畏敬し『祈る』行為は同じであるのに、表現される形が随分異なります。たぶん来年が最後のデリー暮らしになります。Iさん、ディワリがお正月に似ているかどうか確かめに、是非遊びに来てください。お待ちしています。本年もよいお年でありますように。

（洗足学園短期大学・デリー大学）

☆イラストは、「MY BOOK OF INDIAN FESTIVALS」（Written by-Jamila Q. Varawala Designed and Illustrated by-JennyBhatt Tata Donnelley Limited）より転載しました。

タイのお正月

堀　浩子

タイの「お正月」はソンクラン

一九九九年四月、夫の赴任に伴って三人の子どもと共にタイ、バンコクに渡った。三年間の住居となるマンションに入居して数日後、「歓迎行事です」と夫の同僚の訪問を受けた。マンション内のプールサイドでの記念撮影を勧められ、家族五人で「チーズ」と声をそろえた瞬間、どこに身を潜めていたのか総勢十人位の他の同僚や家族たちから思い切り水をかけられた。これが「水かけ祭り」と言われるソンクランの日恒例の「歓迎行事」で、こうして私たちはタイの「お正月」であるソンクランを、まずは

身をもって体験させてもらったのだった。

ソンクランについて、タイの小二生の生活科の教科書には「タイでは四月十二日から十四日までの三日間を昔から今に続く正月としている。最近では家族の日ともされている。ソンクランの前には家の内外を特別にきれいに清掃し、当日は家族でお寺にお参りしたり、僧侶に托鉢したり、徳をつむため魚や鳥を放生したりする。また銀の器に水を入れ、僧侶や仏像に水かけをして恵みを祈ったりする。正月を祝う決まり事が済むと、友だちや親類同士水をかけ合ったり昔ながらの遊びをして楽しむ」と説明されていて、日本の「お正月」と似通うところが多くある。

国際的な新年として一応タイでも一年は一月一日に始まり、この日も新年を迎える祝日にはなっている。十二月下旬には新年を祝うタイの歌がそこここで聞こえたり、大晦日の深夜にはイベント会場でカウントダウンや花火が企画されたり、テレビでもタイ版「ゆく年くる年」が放映されたりする。日本とは二時間の時差があるので、私たちは十時前に紅白歌合戦を見終わり「ゆく年くる年」で除夜の鐘を聞いてからタイの新年を迎えていた。日本と異なるのは、年が明けるとまずすべてのテレビ局が年頭の言葉を述べる国王を映し出し、次いでタイで信仰されている主だった宗教の代表者が年頭の言葉を一人ずつ述べていくことだ。こんなふうに新年を迎える行事があるにはあるが、公共機関や学校も元日が祝日扱いで休みになるだけであまりふだんと変わりない。

それに比べてソンクランの三日間は公共機関も民間の大小企業もほぼ完全にストップする。営業するのはコンビニエンスストアか主に外国人客をターゲットにしたスーパーマーケット、レストラン位だと思う。学校は年度替わりの約二ケ月の夏休み中だ

し、帰省する人も多いので、日頃渋滞の激しいバンコク市内も丁度三ケ日中の東京のようにガラガラになる。タイの人にとってはやはりソンクランが「お正月」なのだ。

街なかのソンクラン風景

滞泰中三度のソンクランを私たちはバンコクで過ごした。

この三日間油断は禁物である。初めの年家族で歩道を歩いていたら、見知らぬ人がすれ違いざまに水鉄砲で私たちに水をかけてきてニヤニヤしている。初めてで少々驚いたが、ソンクラン中にはよくあることだった。でも怒ってはいけない。相手に感謝して、できればこちらからも相手の幸せを願ってかけ返すのがソンクランの礼儀ということらしい。

ガラガラになった市内では、歩道で子どもたちがバケツと水鉄砲を用意して通りかかる人や車を待ちかまえている。車道ではピックアップトラックに大きな甕やドラム缶に満タンの水と水鉄砲を持った人たちを乗せた機動部隊が往来し、歩道の人に水をかけたり居合わせた車同士激しくやり合ったりする。我が家の車も信号待ちの時など歩道や車上から何度か思い切りかけられたこともある。

タイの気候の中でも最も暑いこの時季、農閑期や学校の夏休みも重なり、タイの各地でお正月気分で思い切り盛り上がるようだ。水のかけ合いに気を取られて、毎年のこの時期事故で亡くなる人が何人かいるのだそうだ。

三年目のソンクランではマンションの駐車場で、馴染みの運転手さんや警備員さんたちと私たち一家とどちらからともなく水のかけ合いが始まった。興じるうちに双方完全に無礼講で思い切りやり合って皆全身ビショビショになり、思わず心の底から笑い合ったことは忘れられない思い出になっている。

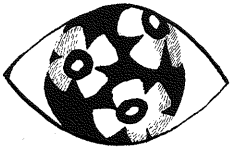
ソンクランと帰省

この休日は地方からバンコク等の都市に出て職に就いている人にとって、故郷の家族、親族、友人に会える貴重な時でもある。お手伝いさんの仕事に就く女性には親への仕送りや子どもの養育費のために出稼ぎに来ている人が多かった。我が家のお手伝いさんも三歳と五歳の娘を自分の親元に預けて夫婦でバンコクに来ていた。タイでは全国的に母方の祖母が子どもの世話を引き受け、母親も仕事をして家計を支えるのが通例らしい。だからこういうタイの女性にとっては特に、ソンクラン休暇の帰省が大切な機会なのだ。

滞泰中、私は多分一生に一度の、お手伝いさんを雇う経験をすることになった。お手伝いさんとの面接では契約書に必ずソンクラン休暇の項目について確認し合う。ソンクランそのものは三日間だが、実家の遠い人は帰省の往復日数も含めた休暇日数を約すべくこの時交渉する。また規定の賞与をこの時期に受け取りたい場合はこの時申し出るなど、彼女たちにとっては労働条件の重要な一要素になっている。なるべくたくさんおみやげを仕入れ、なるべく長く故郷にいられるよう腐心するのだ。同じ方面に乗り合わせていくバスのスケジュールと休暇日数が都合よく合わない時は、彼女たちは悪びれもせず「バスがないのでこの日までに戻れません」と、契約したはずの休暇日数を延ばすのである。

バンコクからは同時期に同じ地方に帰省する人が集まるので、往復ともバスはたいてい定員オーバーで、時には道中半日ずっと立ったままのこともあるそうだ。

どんなに大変な思いをしても故郷に残した人たちに会いに帰る



日、多くのタイの人にとってソンクランはそういう日でもある。

タイの人の気性

私の知る限り、タイの人には日本人にとって程「がんばる」ことが快感ではないと思う。もともとタイ語にはその単語もなかったが外国語と対訳するため作られたとかで「パヤヤーム」という、日本語のイメージからすると何だか軟かい響きの言葉だ。熱帯にあってとりあえず生きるに充分な食糧を手に入れられるタイの人には「がんばる」必要も習慣も生まれてこなかったということかも知れない。

また余程自分の生活に支障がなければ、心地よく感じられないことは無理してやらない。面倒だ、疲れる、好きじゃない、おもしろくない、というのも何かをしない理由として通用するのである。言い換えれば、自分はもうこれで充分、と足ることを知っている、ということでもあると思うが。

だからそんなタイの人たちが帰省ラッシュにもめげず故郷に向かう様子はあまり似合わない気がしてちょっと不思議だった。でも今改めて思い返すと、タイの人に根づいた生き方がそこに現われているとも思えてくる。

タイの人の心に根づくもの

タイの人たちは男女を問わず、また若い人でもすごく子どもを可愛がる。商店やレストラン等で子どもを連れていると、初対面でも、手すきの店員が目を輝かせて話しかけてきて、手をつないだり、抱き寄せて頬ずりやキスをしたり、こちらが戸惑う程かまってくれる。四歳で渡泰した坊主頭の長男は、当時タイで人気だったテレビアニメの「一休さん」の影響もあって、わざわざ他の同僚を呼びに行ったり、別の部屋にいる同僚に見せに連れて行かれそう

になったこともある程だ。

また観光地などに出稼ぎに来ている女性たちの子どもを見る目にはもっと熱いものがあった。海辺の屋台のおみやげ屋で買い物をした時、当時小五だった長女の年齢を聞いて「私にも同じ年頃の娘がいて田舎に残して来ている。三人とも可愛いからこれをあげたいんだけど」と売り物の小さなカエルの玩具を一つずつ子どもたちに持たせてくれた女性がいた。自分の収入は減ってしまうのに、私たちが戸惑いながらもお礼を言うと彼女は「(受け取ってくれて)うれしい」と笑っている。また、別の観光地で、小二だった次女が買い物をした屋台の女性は、娘が自分のおこづかいで買うと知ると途端に目が優しくなり、結局初めの値の四分の一にもなる娘の言い値で「いいよ」と言う。それでは赤字だろうと思うのに、うれしそうにお礼を言う次女を見て満ち足りた笑顔を返してくれるのだった。

タイの人には、相手が子どもの事となると仕事や損得勘定は全く度外視して、何かをしてあげたいと思う心のままに動いてしまうところがある。そういう人や場面にずいぶん出会った。子どもを可愛がること、大切に想うこと、子どもを可愛いと思う気持ちを大事にすることがタイの人にとっても心地よいと感じられることなのだと思う。そうなるとどんなに大変なことでもできてしまうのだろう。きっと、だからどんなにクタクタに疲れても面倒でも、ソンクラン休暇には大切な家族たちのいる故郷に帰省していくのだと思う。

学生時代に聞きかじった比較行動学の話の中で、哺乳類の動物はたとえ肉食であっても子どもの特徴を持つ相手に対しては攻撃しない「本能のスイッチ」のようなものを持っていて、その能力を持つ種が結果的に存続してきていると聞いたことがある。タイの人の子どもへの対し方は、この「本能のス

イッチ」という言葉を思い起こさせる。自然の命ずる心の動きにけっして逆らわない。むしろそれを人として心地よい感情として肯定できる心が根づいているように感じる。

またタイの人は男女を問わず、何の照らいも躊躇もなくお年寄りをいたわる。その行為もまた、そうすることを心地よいと感じられる同じ心根から生まれているように思える。

タイの国に学ぶ

全くの私観なのだが、タイの社会では、その理屈抜きの子どもへの思いが子どもにも理屈抜きに伝わり、それが自分の存在への自信、父母や年長者への信頼と敬意といたわりの気持ちを生み、長じて今度は自分が同じように子どもを可愛がる、そんな循環のようなものがずっと機能し続けている気がする。

帰国後、愛情に恵まれない子どもが増えている日本の状況を知るにつけ、自然の摂理を損わず、未来につながる人の心根を支える社会を築いてきたタイの人々の知恵に、学ぶべき事がたくさんあると改めて思っている。

四月半ば、日本でも流れるソンクランのニュースに、タイの人たちの子どもたちをみつめる熱い眼差しを、また思い出していた。

（北海道幕別町代替保育士）

中国の旧正月 ―春節―

首藤　美香子

春節を前にした中国の光景は――――家族や親戚への土産物でいっぱいに膨らんだビニール鞄を天井に山積みにして走るオンボロの長距離バス、車窓からのぞくのはわずかな賃金のための出稼ぎ労働からしばし解放されて呆けたような日焼け顔、あるいは故郷へとはやる気持ちを抑えきれず、小賢しく我先にと割り込む連中のせいで、絶えず列が乱れ怒号が飛び交う駅の切符売り場や空港の手荷物検査場、待合室ではこれからの長い旅路の空腹を満たすために、しゃがみこんでかきこむカップ麺からたちあがる化学調味料のしつこい匂い、他人のことなど気にも留めないような寛いだ格好で会話に熱中する人々の抑揚の強い中国語――――旧暦の正月を祝うために、首都北京から地方に向けてはじまる民族大移動

の一場面が真っ先に目に浮かぶ。それは、居合わせると不愉快で顔をそむけたくなる気分になるのに、こうやって想い起こすと、年に一度のハレの日を待ち望む人々のあまりにも素朴で率直なふるまいのあれこれに、いとおしささえ感じられる。

中国では、旧暦の正月を祝う春節は、労働節（五月一日）、国慶節（中華人民共和国建国記念日　十月一日）に並ぶ国民の休日だが、後者が政治的な意味合いを持つのに対し、春節は天体宇宙の原理と農耕民族の知恵に根ざした最も心躍る年中行事といえよう。一九一一年より導入された新暦の一月一日は今もって見向きもされないのに対して、短くて三日、長くて一、二週間も休める春節を前にすると人々はそわそわしはじめる。挨拶代わりに、「春節はどうするの、今年は親元に帰らないと」「どこか旅行に行きたいなあ」「今年はどういう順番で年始回りに行こうか」「景気が悪いけど会社からボーナス（紅包）はもらえるのかな」「年明けてみるとお払い箱になっていたらどうしよう」「春節見舞いを配り始めたぞ」などと尋ねあい、時に顔をほころばせ、声をはずませる。

「近年は暖冬続きでまったくしのぎやすいものだよ」と、たしかに北京人は慰めてくれるけれど、春節の時期は寒気が極まるころ。「今日はわりあいあったかいね」という時でも最高気温一、二度、内陸を吹き荒れる北風は足元からからだの芯をきりきりと凍らせ、空は不機嫌そうにずっと曇ったまま。そんな灰色一色のどんよりした世界を、ぱあっと明るく染め上げてくれるのが春節の飾りつけだ。映画「紅夢」でおなじみとなった真紅の派手な提灯がいたるところにぶらさげられ、門の左右両側には細長く切った赤い半紙に縁起のよい対句が書かれた「春聯（しゅんれん）」が貼られる。門扉や室内には、ころころと太った童子が花や魚、果物を手に戯れ遊ぶ姿が豊か

な彩色で木版された年画や、福が来るようにという願いをこめてわざと上下さかさまに貼られた「福」の字、干支をデザインした精巧な切り絵など、幸運の象徴といえる赤の装飾が一面を覆うころには、冬の厳しさも心細さもかき消され、お祭り気分がかきたてられる。

ここで、有名な天津にある楊柳青の年画を紹介してみよう。楊柳青の年画の美しさは、繊細で表情豊かな黒の摺り線に、紅・黄・緑・藍・紫が鮮やかに彩色されていることにある。年末になると次の年の「吉祥如意」「幸福生活」「家運隆盛」「富貴栄華」「高位出世」「子孫繁栄」を願って貼られる水印木版の年画は、民衆のために民衆によって量産されてきており、四大生産地のひとつ天津の楊柳青は明代中期から四百年の伝統を持つという。歴史故事、文学演劇、風俗時事、名所旧跡などさまざまな題材が選ばれてきたが、特に好まれてきたのは「子ども」

▲「福寿三多」

の図柄といえよう。

たとえば、「福寿三多」では、丸々とふくよかな童子三人が、佛手柑、桃、石榴を手にしている。佛手柑は、仏の様な「恵み深い人」の意味とそれが成育すると多数の指状に分岐することから「多福」の象徴とされる。一方、桃は刀（タオ）・逃（タオ）と同音であることから古くから悪魔除けの力を持つとされ、また桃源郷を象徴する樹木として永遠の生命や幸福を授けてくれる多寿・長寿の象徴、さらには実の形が邪気を払う姿＝女陰に類似していることから吉祥の植物とされてきた。最後に石榴はたくさんの実をつけることから多子豊穣の象徴とされてきた。これら三つの果物に「福多かれ」という人々の願いがこめられてきたのだった。

もうひとつ「五子奪蓮」は、元気な男の子達が蓮の実を奪い合っている絵図で、別名「五子奪魁」（子どもたちが首席を占める）とも呼ばれる。そこには、単に子孫繁栄のために男児誕生を願ってきた素朴な信仰心ではなく、「奪蓮」つまり科挙に連続して合格し、更に上級の職に就いて天下を取るほどに出世し、家名を上げてほしいという強い欲望のあらわれであった。まさしく高級官吏の輩出が一族の命運を分けるようになる明・清時代の社会情勢を反映した図柄といえるだろう。

さて、春節を祝う食べ物といえば、水餃子だろう。家族そろっての水餃子作りは、中国北方の人々にとって大晦日の楽しみな作業だ。冷蔵庫が普及した最近では、スーパーでも冷凍餃子が一年中売られているけれど、それぞれの家庭に伝わる味は大切に守られているように思われる。家事の手助けのために我が家に来てくれていた生粋の北京人、張学英さんの自慢は、腰は強いけれどちょうどいい厚みで、喉ごしのつるんとした餃子の皮と、安くて美味しいものを求め試作を重ねてあみ出される餡の種類の多

▲「五子奪蓮」

さだった。

普段でも餃子は主食だから作ってもらっていたけれど（なぜ日本人は餃子とご飯を一緒に食べたがるのかと、あきれられていたけれど）、春節前の彼女の張り切りようは特別だった。

「さあて、餡は何にしようかね、子どもたちの好きな三鮮（豚肉と干しえびと野菜）はいるだろう。白菜、キャベツ、しいたけ、木くらげもいいけど、いんげんや香菜を使ったのもなかなかいけるよ。羊肉とキュウリは私の一番の好物、変な顔しないで食べてごらん。いり卵とニラだけのもさっぱりしていいよ。そうそう○○は春雨を入れてほしいといっていたね、子どもたちも大きくなったことだし、一人で一度に二十個は最低食べるとして、豚ひき肉は何グラム、羊ひき肉は少なめにしとこうか。二百個くらい作って冷凍しておくかい。そうそう餃子粉は新しいのを一袋買ってこないと……」と、苦手な計算を

ちびた鉛筆をなめなめはじめる。

「春節前は食品の価格が暴騰するから参ったね、間違ってもスーパーで買い物したらだめだよ」「奥さんは自由市場の値段交渉は下手だから、他にいるものがあるなら今のうちにさっさとメモしておくれ」

「白菜とニラの残留農薬（特に水銀）の多さは相変わらずらしいよ、どんな野菜も水につけて毒をぬかないとね。全く手間がかかってしょうがない」と、いつもにましておしゃべりになる。

ここで張さんの餃子の作り方を紹介してみよう。まず餃子粉を水で練って寝かした後、ふくらんだ塊の中央に二本の親指を入れて、くるくる回しながらドーナツ状にする。五百円玉くらいの太さにまで細くし、輪っかを四等分して棒状にする。それを包丁でひと皮ぶんずつ均等に切り分ける。できた小さな塊に粉を十分に叩いたあと、手の平の付け根でぐいっと平らにし、真ん中をくぼませ、周囲を丹念に麺棒で伸ばし一ミリメートル程度の皮にする。ちょっと多いかなという量の餡をのせ、軽く握った両手に包んでくいっと力をこめると、自然にしわがより、まるで小船か冠のような馬蹄銀（昔の通過元宝）の形に整えられる。手品を見ているかのような指先の動きと、一分間に三十個近く餃子を作り上げる目の回るような早技に見入っていると、料理自慢の彼女の鼻が「ふん」とばかりますますふくらんでくる。

もともと満州族の食べ物であった餃子（ジャオズ）をなぜ大晦日に食べることとなったか、いろいろな説がある。たとえば、馬蹄銀に似た形の餃子を食べて金儲けを祈るためだとか、発音が同じ言葉「更年交子（ジャオズ）」と近く、新旧の年がかわって改まる意味が託されているためだとか。いずれにせよ、家族総出で餃子を作り食べることによって、血縁の結びつきをより強くし、互いの健康と幸福を願う気持ちをはぐくんでき

たのではないかと思う。

こうしてお腹いっぱい水餃子を食べ、日本の紅白歌合戦のような「春節聯歓晩会」というテレビ番組を見ているうちに、零時が近づくと、戦場にまぎれこんだかのようなパンパンと耳をつんざくような激しい炸裂音が鳴り始め、あたり一面煙でもうもうとしてくる。郊外では今でも、大人も子どもも狂喜乱舞して、闇夜を真昼のように照らす連発爆竹に興じ、そのいつ果てるともなく続く景気のよい音が祝祭気分をもりあげてくれる。赤い紙に包まれた小さなロケット型の火薬を大地に向かって次々とたたきつけ、両手で半分耳をふさぎながら足にあたらないようにパッと避ける。男の子達が、いい年をしたおじさん達が嬌声をあげ、競い合うように、まるで間が空いては興ざめとばかり鳴らし続ける爆竹をはじめて耳にしたときは、なんと乱暴な新年の迎え方だろうと驚き、その攻撃性に恐怖さえ覚えた。

たしかにそれは、厳粛な気分で除夜の鐘の音を聞き、来る年の平穏無事を祈る日本のお正月とは、まるで対照的だろう。大きな音とまばゆい光で大晦日に出るとされる悪鬼を追い払うために、あるいは竈神を先頭に下界に降臨してくる八百万の神を迎えるために鳴らされるという爆竹は、その民族学的な由来は別にして、歴史を通じて自然の脅威や圧政に耐えしのんできた人々の心を解き放ち、新たな困難にも前向きに立ち向かっていこうとする中国の民の強い意志のあらわれさえ感じられる。最近では、防火のため市の中心部での爆竹が禁止され、また資金難にあえぐ地方の学校では、授業もそこそこに子どもたちに花火や爆竹の製造をさせては、事故のために幼い命が奪われるといった話を聞く。けれども、胸のすくような春節の爆竹が、人々の心を励ます明るい音であり続けてほしいと思う。

（お茶の水女子大学）

韓国の子どもとお正月

朴　香俄

お正月は、歴史の記録にも覗ける王から庶民にまで祝っていた韓国固有の一番大きい名節であったし、今もそうである。一八九五年に陽暦の暦を使い始めてから年が明けると迎える新正月が登場するようになった。とくに日本の支配下にあったときに新正月を奨励したり、あるいはお正月の食べ物をお弁当に入れてくる子どもに罰を与えたりして旧正月の意味をなくそうとした。それにもかかわらず、おおくの韓国人は旧暦のお正月を好んで祝ったり、あるいは家庭によって新正月も旧正月も祝う傾向もあった。一九八五年に旧正月を〝民族の日〟と記念して祝っていたが、政府は一九九九年に旧暦の正月をお正月と決めて三日間休日を与えながら正式に認めるようになった。

お正月はこれほど韓国人には根深く生活に密着した風俗である。お正月を〝ソル〟と呼びながら昔から伝えてきた特別な行事を家庭ごとに祝うようになる。まず、年の暮には〝民族の大移動〟と呼ばれるほどの移動が始まる。離れている家族が親の所や年長者のいる親戚の家に集まるのである。

お正月の朝、まず、前日から集まっていた家族は朝早くおきると新しく用意した民族衣裳や服を着て家の年長者にお正月の〝セベ(お辞儀)〟をする。そのときに年長者はお辞儀をする人に健康とか家族について徳談をしたり、子どもにはお年玉をやったりする。この礼が終わるととりあえず軽く〝トック〟という餅のスープを食べる。韓国では〝トック〟を食べないと年をとらないといったりする。その後、祖先に対する祭事を行うが、ほかの祭事と違ってお正月にはご飯の代わりに〝トック〟をおいて祭事を上げる。祭事のあと、隣の年配者あるいは親戚の家を回りながら正月のお辞儀をしながら徳談を分かち合う。これらの一連の行事が終わると家庭ごとにあるいは町ごとに〝民俗遊び〟が始まる。これらの遊びはこの日だけ行われるものではなく旧暦の一月の十五夜まで続けることが多い。韓国の場合、民俗遊びはこの時期に一番旺盛に行われている。

このように韓国のお正月は新年を迎えるという意味だけでなく祖先の恩を覚えたり、家族の安寧を祈ったり、村の繁栄を祈る大事な節句である。

このような雰囲気の中で子どもはいかなるお正月を過ごすのか、あるいは保育機関ではどのように子どもにお正月を楽しませているのか見てみよう。

子どもとお正月

お正月が近づくと〝かささぎ、かささぎのお正月はきのうなのに、私、私たちのお正月はきょうなのよ。とてもきれいな髪結び紐と私のもの、買ってきたあたらしい靴も私のもの。〟と子どもたちはお正月の童謡を口ずさんだり、テレビなどの子どもの番

組にはこの歌がながれるようになる。

子どもにとってお正月は何より楽しい休日になる。親戚が集まってわいわいとする雰囲気の中でなんとなく日常の生活から脱皮して非日常の逸脱を味わえるような子どもに解放された自由を感じさせる妙な気がする時期であるからである。

お正月が近づくと大人は子どもに何を着せようかと考える。新年が明けるとお誕生日とかかわらず一つの年をとるので子どもの成長を祝ってあげたいのと、親戚が集まるので我が子の成長ぶりを見せたがって、親は子どもに〝チマチョゴリ（民族衣装）〟、洋服など新しい服である〝ソルビム（歳粧）〟を用意する。〝ソルビム〟は男女老少にかかわらず用意するが特に子どものためには新しいものをかってあげる風習がまだ残っている。「列陽歳時記」（一八一九）にはお正月に新しい服を着る〝ソルビム〟を〝歳庇陰〟といったというが、この〝ソルビム〟を羽織った人々で道は鮮やかで賑やかであったという記録が残っている。最近も〝チマチョゴリ〟や新しい服と靴などを履いて、普段親しく遊んでいた隣の子どもたちとではなくめったに会えなかった親戚の子どもたちと気持ちよく遊んでいる様子を見ることができる。この時はめずらしく子どもが異年齢の集団になったり、男女混合集団になって遊ぶことをよく見かける。

また子どもにとってお正月の一番の話題は〝セベットン（お年玉）〟である。新年が明けると〝ソルビム〟を着て〝セベ〟という新年の挨拶をする。〝セベ〟は両手を額において腰とひざを曲げて座りながらお辞儀をする様子をいうが、この〝セベ〟をすると年長の方は徳談とともに普段もらえる小遣いとはくらべようのないほどのお年玉をやる。大体身内の人に〝セベ〟が終わると友だちの家を訪ねたり、町の年長の方を訪ねて〝セベ〟をして徳談とお菓子あるいはお年玉をもらったりする。〝セベ〟はお正月の初日に大体終わるので自分たちのお年玉を

比べながら使い道を話しあったりする。

祭事料理、トックなどを食べた後には子どもは徐々に子ども同士で集まって〝ユッノリ〟などの遊びを始める。〝ユッノリ〟はもともと子ども専用の遊びではなく大人の遊びでもある。この遊びは十五から二十センチメートルにあたる二つの丸い萩の木をそれぞれ分けて四つの棒の賽と馬という駒、馬を動かす遊び図を必要とする。普通二つのチームに分けて遊ぶものとして負けたチームが何かの罰を受ける遊びである。チームになった子どもたちは空中に向かって投げた〝ユッ〟という四つの棒がどのような模様になるか緊張しながら見ていたり、自分たちが願う模様にならないと溜息をつきながらがっかりしたり、投げた人を恨んだりもする。しかし、この遊びの楽しさは負けていた駒が先に走っていた駒をとってしまい追い越したりすることにある。その故に、駒を動かす子は遊びの仲間で一番知恵のある子が担当したり、あるいはみんなの意見を出して決定したりする。たまには大人も子どもと一緒に遊ぶこともある。この遊びは年齢や性別などの区別があまりつかない遊びである。

これらの遊び以外にも大人と一緒にお正月特別テレビ番組を視聴したり、コンピューターゲームを楽しむ子も増えつつあるので、最近は子ども同士で遊ぶ機会と伝承遊び自体が消えつつある傾向になっている。

保育機関でのお正月と子ども

最近、韓国は科学技術の急速な発展とともに社会全般に固有の伝統文化が断絶されているという批判の中で、二〇〇〇年から施行する第六次幼稚園教育課程で〝わが文化に対する理解の下で新しい価値を創造する人間〟を理想的人間像として、改定の基本方向を明らかにし

た。各地域の教育管轄部署では〝伝統文化に関心を持って継承・発展することと地域社会の伝統文化も理解できるようにする〟と教育課程運営指針を出して、地域とともに国全体が伝統文化の教育に関心を持つようになった。

このように伝統文化や伝承遊びに対する関心は高まりつつある中で、第六次教育課程を実施するために作った「幼稚園教育活動指導資料」には「特別な日」という資料集を出して韓国の名節や記念日についての活動を紹介している。教師はこれらの資料に基づいて遊びを計画して年中、わが国の文化遺産ともいえる伝承遊びや食べ物、楽器などを基本的な生活の中に取り入れ、伝統の概念と活動を保育の場に根付かせようとしている。

その中で、お正月はどうであろう。保育の機関によってやや違うが、幼稚園の場合はお正月は冬休みに入っているのでお正月を巡ってやる遊びはそれほど活発ではないが〝子どもの家(保育所)〟は年中保育をするのでお正月を迎えられる。お正月はもともと新年のはじめから中旬の十五夜（ボルム）までが一つの節句の意味を含んでいるのでお正月の時期になると十五夜までの伝統文化と接することができる。

保育の場はお正月を迎えるために装いを新たにする。玄関の掲示板には新しい年を象徴する十二支の中でその年に当たる動物の模様の飾りをしたり、歳画(鶏や竜の絵を書いて悪鬼を追い出す風習）を貼り付ける。また、各遊び部屋にはセベ（お辞儀）する姿、祭事を行う様子、お正月の食べ物、民俗遊びなどの写真を飾っておいて正月や名節の雰囲気を作る。ままごとのコーナーには民族衣装、履物、昔の帽子、伝統の小銭入れなどを置いておく。図書もお正月と十五夜に関する昔話の本を置いたり、音楽も伝統の音楽を鳴らしたりする。

このように保育の場は伝統文化の雰囲気に包まれているので、子どもは普段とは違って弾んでうきう

きとしている。たまには民族衣装を着て登園する子もいる。子どもの遊びもかなり伝統のものが多く行われる。朝登園すると室内では自由遊びの時間に民族衣装を着てままごとをしたり、普段見られなかったいろんな遊具を持って遊ぶ。また、集まりの時間にはお正月の由来や昔話をきいたり、凧揚げのために凧を作ったり、独楽と独楽の鞭を作る。年中よくやるメンコ作りもこの時期にはより活発になる。お昼には〝トック（お餅スープ）〟を食べる。子どもはトックを食べながら自分たちが年がひとつ上がったことを自慢そうにしゃべる。

室外では、数日間作った凧や、メンコ、独楽遊びをしたり、〝ノルティギ（板跳び）〟や十五夜の風習である〝ジブルノリ（松明遊び）〟をする。

以上のように、一月にはいって二、三週間ほどは伝統の遊びや文化の中に包まれている保育の場の中で、子どもは日常とは違う雰囲気を味わいながら知らず知らず伝統の意味や風習を身につけていくのである。

お正月や名節になると土産を手にぶらさげて帰省する洪水のような民族大移動の流れの韓国人を見ると不思議な感じがすることもあるが、このようなエネルギーは個人性の強い現代社会を生きながらも社会を一つにまとめるいくつかの価値を支えている土台になっているといえよう。子どもにとっても例外ではなく、お正月を通して日常では味わえなかった家族の親密感、祖先や年長者に対する礼、民族風習、遊びなどを楽しく経験できる貴重な機会をえることができるし、保育の中でも子どもたちが体験する多様なお正月や名節の遊びは生き生きと遊ぶ子どもらしさを取り戻してくれることと思われる。

（韓国　慶南大学校）

「出す」ということ

小倉　定枝

私はこの夏、謎の湿疹に苦しめられた。私が勤めている幼稚園は、日頃は忙しいが、夏だけはゆっくりと休みが頂けるので、これ幸いとばかりに怠惰な生活を送っていた矢先の出来事であった。ある日突然頭皮に湿疹らしきものができ、そのうちにそれがだんだん頭全体に広がって、痒くて夜も眠れなくなってしまった。医者に行って薬をもらっても、一時的には治るがまたひどくなって出てくる一方である。そのうちに、その湿疹が顔にも出始めて、いよいよ恐ろしくなってきた。何が恐ろしいと言えば、原因がわからないのが恐ろしい。もしかしたら、恐ろしい病に感染してしまったかもしれないと本当に心配になったのである。しかし、どうやら恐ろしい病ではないらしい

ので、私は予てから信奉していた自然医学的な治療を行うことにした。

以前から信頼している先生の説によると、過食で胃腸の粘膜に微細な傷ができ、その傷を通って腸内の「何物」かが体内に侵入したため、体内でアレルギー反応が起こったということらしい。少食を続けて体内に溜まったものを出し、胃腸を休めて微細な傷を治すという身体の内側からの治療、および体質改善が有効であるとのこと。あわよくば、てっとり早い治療を……と望んでいた私も、観念してこの少食を徹底することにした。しばらくすると、また湿疹が悪化して見るも無惨な姿になってきた。しかし、胃腸の傷が治ってくると、今度は体内の毒素が排泄され始めるため一時的に悪化するのはやむを得ない、むしろ毒が出ているのだから喜ぶべきことであるらしい。いつも通っている鍼灸師の先生も「出すものは出さないと。まあしばらくかかるでしょう」とつれない。それでも、体内にこんなに毒素が溜まっていたのかぁと感心する思いで、毒素を出し切ることに専念した夏休みだった。

湿疹に苦しみながらも、「出す」ということについて日頃の保育に共通するものがあるような気がして仕方がなかった。三歳児を担任していた時のこと、五月を過ぎた頃から「先生なんか大嫌い」と、よくAくんに言われた。おままごとをしていて、「わぁ、おいしそう。いただきまーす」と子どもたちの作ってくれたごちそうを食べようとしていると、「先生にはあげないよ。先生だけにはあげない」とも言われた。お片づけをしてくれたことを「ありがとう、Aくん、助かったわ」とほめると「先生なんか優しくないよ」の返事。Aくんが担任の私に気持ちを向けて欲しいという思いでいるということが、私が他の子どもを抱い

ているとわざわざやってきて、その人に「お膝に乗らないで！」と怒ったりしていることなどからも伝わってきた。Aくんの気持ちに応えたいと思いながらも、いざ「先生だけは嫌い」とか「先生が転んで良かったね。ヤッター」なんて言われると、人間が未熟なので、時にはムッとしてしまい、「先生だってそんなことばっかり言われたら、Aくんのこと嫌いになっちゃうかもしれないよ」などと言い返してしまったりして、後から反省するのであった。

それでも、二学期にはおままごとコーナーの隅っこで始めた、動物園ごっこのお客さんにずいぶん長い間なった。Aくんが箱に一人で入り、牛になって「モー、モーー」と鳴いたりするのを見ては、「牛に餌をあげよう」と他の人を誘って餌をあげにいったり、みんなで動物園の看板を書いて「何の動物がいるんだろう」と見にいったりした。「今日は、タイガーだよ」「今日はワニだよ」とタイガーやワニになりきっているAくんを心底から可愛いと思った。

十月になって、今まで私が描いていたウルトラマンのお面をSちゃんとRちゃんが自分で作り始めたことからお面作りが流行り、Aくんもウルトラマンのお面を自分で作れることが嬉しい様子だった。何度も描き直しては、自分が納得するものを作っていた。十月下旬のある日、「先生ウルトラマンエースになって！　Aくんはゾフィーね！」と言う。外に出てエースとゾフィーが羽を

開いて飛んだ。エースが怪獣に捕まって「ゾフィー兄さん助けてー」と叫ぶとゾフィーが助けに来てくれた。

十一月の朝、「Aくんおはよう」と挨拶をすると、「先生、先生はちょっとだけ遊んであげる、ちょっとだけだよ」と言う。「ちょっとだけでも嬉しいわー」。その翌々日には、「先生、先生のことこれくらい好きだよ」と親指と人差し指をほんのすこーし開いた。これには嬉しい、嬉しいとオーバーに喜んだ。なにしろ、毎日、「嫌い」と言われていたので本当に嬉しかった。その次の日から、「今日はこの位」と親指と人差し指の距離が少しずつ伸びていった。

三学期にはお弁当を隣で食べようとすると、「駄目だよ！ ここで食べちゃ駄目！」と言われたが、「いいじゃない、一緒に食べようよ。先生は一緒に食べたいの」と言うと「ま、いっか」の返事。Yちゃんに「先生のこと好きなんでしょ？」と聞かれて、小さく頷いていた。今まで駄目だったことが許せるようになってきたのかな？ と成長を感じて感慨深いものがあった。

さて、話はまた湿疹に戻るが、湿疹が出てきた時は「何が出てきたのか」とこれまでにない状況に驚いて、どうにかして早く湿疹を止めたいと思った。湿疹だらけの顔で友人や親戚に会うと、「薬を塗ればすぐに治るから、塗った方がいい」とも勧められた。どうやら、何か想像もしていない不愉快な現象が現れるとすぐになんとか止めたいと思うのが、人の常らしい。しかし、薬ですぐに止めたところで、表面的には良くなっていても、結局、身体の内側に問題があるので、後々になってもっと大変な事態に陥るということが予測される。冒頭に挙げた先生の著作を読んでいて、

「最近の世情は〝入れる〟ことが無闇に強調され（中略）、〝出す〟方は軽視されがちであります」とあった。確かに、何にしても「入れる」ということには熱心だが、「出す」ということは社会にあってあまり重視されていないようだ。

保育にあっても、大人からするとやっかいとも不可解とも思えることが子どもから「出る」と、なんとかしてやめさせたいと無意識に思ってしまうことが多いだろう。とはいえ、湿疹に薬を塗って一時的に治すのと同じように、叱ったり、「出せない」雰囲気を作って一時的にやめさせても問題は解決しない。また、「出て」いるのだからとそのまま放っておくことが望ましいとも思えない。

保育者として三歳児の担任を持って初めての年に、片っ端からおもちゃをひっくり返して歩く人がいた。私は、「気持ちをわかっていれば大丈夫」と思って、特に何ら伝えることもなく、後からぐちゃぐちゃになったおもちゃを整理してまわっていた。しかし、その人の気持ちはガサガサと荒れていく一方で、私の気持ちが伝わっているとは到底思えない状況だった。後に、「気持ちをわかっている」というつもりでいながら、その人の気持ちに正面から向き合うのを避けていただけではなかっただろうかと大いに反省させられた年だった。

先のAくんとの関わりでは、時には叱ることもあったし、怒ることもあったが、関係を作ろうと一生懸命だった。私の保育の何かが違うのだろうかと迷ったり、焦ったりしながらも、何とか気持ちがAくんに届くことを祈りつつ毎日を過ごした。そうしながらも、ひたすらあきらめずに待った。だからこそ、気持ちを素直に表現してくれた時は嬉しかった。懸命に関わりながらも、待つと

いうことの大切さを教えてもらったように思う。

今年は、初めて四歳児の担任になった。四月、少し緊張気味だった子どもたちも五、六月になるとだんだんと自分を「出す」ようになってきた。みんなが集まって話を聞くときに羽目を外して踊ってみたり、押されたと言って大声で泣いたり、何か気に入らない事があるからと、靴箱の隅ですねてじっとしていたり、ここが痛いあそこが痛い、と傷とは言えないような傷をさして言いに来たり……人によってそれぞれ出し方は違うが、その人なりに今必要だから「出して」いるのだと思う。クラスはいつもワイワイと賑やかである。賑やかすぎて「本当にこれでいいのかしら？」と焦ることもあるが、それぞれの思い思いの表現が一つにまとまった時、何とも言えない一体感を感じることがある。

この原稿が掲載される一月には、私の湿疹は跡形もなく消えているのだろうか。そして、クラスの子どもたちは一体どういう姿で毎日を送っているのだろうか、少しは落ち着いているのだろうか??……とても楽しみである。

経験が浅く、未熟な私であるが、子どもたちが様々な形で自分を「出して」くれることに感謝しつつ、これからも子どもたちがありのままにその時々の自分を「出せる」ような保育者でいたいと思う。

（洗足学園大学附属幼稚園）

参考・引用文献

甲田光雄「アレルギー性疾患の克服」創元社一九八六年

編集後記

新しい年を迎え「幼児の教育」は第一〇四巻に入ります。今年もよろしくお願いいたします。

「アジアのお正月」を特集しました。新暦の一月一日をもって厳かに新年を寿ぐということが、アジアで決して一般的ではないということがわかります。旧正月の名残はあるものの、日本は、暦の上でも、西洋的な近代にならって鮮やかな切り替えをはかり、またそれを成し遂げてきた国なのでしょう。

今号から連載で、十八世紀ドイツの児童書について、佐藤茂樹先生が紹介して下さいます（隔月六回の予定）。西洋近代の本家本元で、大人の教育的な思いが生成されてきた時代の雰囲気を、児童書の研究を通して明らかにしていただけるものと期待しております。あのグリムやフレーベルも子どもの頃触れた本なのかもしれません。「袈裟の下から鎧」が見えそうな教育は、今の日本にも通ずるところあり、でしょうか。

今年号を飾る表紙は、水面に映るわが身を見て何を思っているのか、中井絵津子先生の絵です。カットは引き続き彌永たたえ先生に描いていただきます。幼稚園や保育園における環境のように、本誌に寄せられる数々の文章を引き立て活かす雰囲気作りを、両先生に一年間よろしくお願いしたいと存じます。

幼い子どもたちにとって、二〇〇五年が少しでもよき年となりますように。

（浜口）

幼児の教育

第一〇四巻 第一号
（二〇〇五年一月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十七年一月一日
編集兼発行人 浜口順子
発行所 日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所 図書印刷株式会社
〒108—8620 東京都港区三田五—二二—一
発売所 株式会社 フレーベル館
〒113—8611 東京都文京区本駒込
六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替 〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる
「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ

好評発売中

行事別保育のアイデアシリーズ ④
みんなでつくろう
発表会

花輪　充　著

日常の保育を発表会へと発展させていくためのユニークな脚本集。簡単なリズム遊びからミュージカルやオペレッタまで、子どもたちがふだんの遊びの延長で取り組むことができ、発表会が魅力いっぱいのものになります。「発表会まで」と、「発表会では」のアドバイスに楽譜を多数収録。

AB判　96頁　定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデアシリーズ ⑤
みんなわくわく
クリスマス・お正月

島本一男　著

子どもが楽しみにしている行事、クリスマスとお正月をどのようにして保育の中に生かしていったらよいのか。本書は、子どもと一緒につくる製作物のアイデアやパーティーでのゲーム・出し物のアイデア、遊び歌などの事例を多数紹介しています。新しいクリスマス、お正月のヒント集です。

AB判　96頁　定価 2,310円（税込）

〔既刊〕好評発売中！

行事別保育のアイデアシリーズ①
元気がいっぱい夏期保育

やまもとかつひこ監修／
関西あそび工房著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデアシリーズ②
みんなにこにこ運動会

ワークショップりんごの木著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデアシリーズ③
心を伝える入園式・卒園式

小林紀子編著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇四巻　第一号　平成十七年一月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

21世紀保育ブックス

最新刊

編集委員　森上 史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎 正行（大妻女子大学教授）
柏女 霊峰（淑徳大学教授）

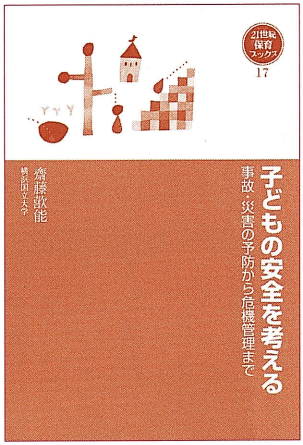
これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

21世紀保育ブックス⑰

子どもの安全を考える
事故・災害の予防から危機管理まで

齋藤歌能（横浜国立大学）著

子どもの事故の実態をみながら、子どもの心身の発達と事故の関係、事故・災害の防止、不審者に対する危機管理など、理論と実際の両面から幼稚園・保育所における積極的な安全教育を提案します。



【目次から】

第１章　子どもの遊びと事故
第２章　子どもの心身の発達と事故
第３章　子どもの事故の実態
第４章　安全教育の基本
第５章　幼稚園・保育所における災害防止
第６章　遊具事故の防止
第７章　登降園時における交通事故の防止
第８章　幼稚園・保育所における不審者に対する危機管理
終　章　安全教育のポイント

B6判　200頁　定価1,260円（税込）

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて	森上史朗　著
②新時代の保育サービス	柏女霊峰・山本真実　共著
③カウンセリングマインドの探究	柴崎正行・田代和美　共著
④子ども虐待の理解と対応	庄司順一　著
⑤知的好奇心を育てる保育	無藤　隆　著
⑥保育者の「出番」を考える	吉村真理子　著
⑦地方自治体の保育への取り組み	山本真実・尾木まり　共著
⑧乳幼児期の「心の教育」を考える	阿部和子　著
⑨自由保育とは何か	立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著
⑩保育者が出会う発達問題	大場幸夫・前原　寛　共著
⑪保護者の要望をどう受けとめるか	小笠原文孝　著
⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る	吉田正幸　著
⑬子どもの健康を考える	巷野悟郎　著
⑭「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ	今井和子・神長美津子　共著
⑮21世紀の子育て支援・家庭支援	伊志嶺美津子・新澤誠治　共著
⑯保育をデザインする	戸田雅美　著

以下続刊

キンダーブックの フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。